〔農業経済研究　第 85 巻，第 3 号，2013〕

国際農業経済学会大会における研究動向

── 2012 年ブラジル大会と過去の大会との比較から ──

大　江　靖　雄[1]

Comparison of the Research Trend of the 28th IAAE Conference in Brazil with That of Previous Conferences

Yasuo OHE（Chiba University）

This study reviews the trend in research by focusing on papers presented at the 28 th IAAE, International Association of Agricultural Economists, a conference held in Brazil in 2012, in comparison with those presented at previous IAAE conferences. The IAAE conference is the largest among international meetings for agricultural economists; thus, reviewing papers at this conference is useful to grasp the current research trends in agricultural economics worldwide. The study has also considered the significance of the IAAE Brazilian conference in terms of the international contribution by Japanese agricultural economists because, for the first time, a Japanese economist has served as the president of IAAE and presided over this conference. The review revealed the following points. First, the number of poster presentations increased from previous conferences, indicating the stimulation of participation by young researchers. Second, the number of sessions of oral presentation increased in the fields of development economics and resource/environmental economics. These two fields accounted for about a half of the total number of oral sessions. Market-related topics also increased to attain nearly a 20% share of the oral presentations. There was an expansion of topics, especially in the arena of resource/environmental economics. In conclusion, it is safe to say that agricultural economics is widening its field toward the economics of rural resource management from the field of traditional production-oriented economics.

Key words: IAAE（International Association of Agricultural Economists), research trend, agricultural economics

1. は　じ　め　に

第 28 回国際農業経済学会 IAAE 大会が，2012 年 8 月にブラジル南部のイグアス（Foz do Iguaçu）で開催された．IAAE 大会は，3 年ごとに開催地の大陸を変えて実施されてきた最大規模の農業経済学研究者の研究大会である．とりわけ，ブラジル大会は，日本人で初めて IAAE 会長（2009～2012 年期）に就任した大塚啓二郎氏（政策研究大学院大学）が主催者代表であったという点で，我が国農業経済学会の歴史に刻まれるべき出来事である．こうした意義も踏まえて本稿では，世界的な農業経済学の研究動向を把握できる絶好の機会でもあるブラジル大会を対象として，過去の大会との比較を行いながらその特徴を考察して，農業経済学におけるその動向を明らかにしたい．国際学会での研究動向をレビューすることは，我が国農業経済学会の国際化を図る上でも多くの重要な示唆を得ることができると考える．

本稿では，レビューのデータは IAAE ブラジル大会で配布された参加者向けニュース誌「Cowbell」および参加者に配布された Participant's Handbook を用いた．過去の大会については，大江（2006）を比較用に用いた．

ただし，その参加者数と膨大な報告数の規模から，すべてを満遍なく評価することを意図しているものの，

[1]千葉大学
yohe@faculty.chiba-u.jp

第1表　IAAE 大会開催国（2012 年まで）

地域	開催国	開催回数
北米	米国	3
	カナダ	2
欧州	英国	2
	ドイツ	2
	スコットランド	1
	イタリア	1
	フィンランド	1
	フランス	1
	ソ連	1
	スペイン	1
オセアニア	オーストラリア	2
南米	ブラジル	2
	アルゼンチン	1
中米	メキシコ	1
アジア	日本	1
	中国	1
	インド	1
	インドネシア	1
アフリカ	ケニヤ	1
	ジンバブエ	1
	南アフリカ	1

資料：Cowbell, 1, IAAE, 2012.

筆者の能力からして十分カバーできない領域もありうることは，あらかじめご了承いただきたい．また，IAAE 大会のテーマの変遷，組織，歴史的なエピソードに関しては，大塚（2013）によりまとめられており，本稿の背景を知る文献として補完していただければ幸いである．

2. 開催地・参加者数・国別会長就任者数

まず，IAAE 大会の開催地・参加者数の変化についてみてみよう．ブラジル大会までの開催国を整理すると，第1表のようになる．第1回大会は，1929 年に英国で開催され，第2回大会が米国で開催され，第9回のフィンランドの大会（1955 年）まで欧州と米国のみで開催されていた．山田（1991）によれば，この頃までの大会は，欧米の農業経済学者のサロン的な集会であった．その後，第10 回大会でインド，第11 回大会でメキシコと大陸をかえて行われるようになっている．1970 年代から 90 年代前半における IAAE 大会への日本人参加者の概要報告をみると，土屋（1971）はソ連大会，西村（1983）はインドネシア（ジャカルタ）大会，金井（1994）はジンバブエ大会の様子を伝えていて興味深い．

では，その参加者数はどのように推移してきたのであろうか．第1図は，第1回の英国大会からブラジル大会までの参加者数の変化をグラフ化したものである．IAAE 大会は，第2次大戦中の中断を経て，戦後継続して開催され，その参加者数も増加してきたことが示されている．ただし，開催地が開発途上国である場合には，参加者数が落ち込みをみせる傾向がある．今回のブラジル大会も同様である（参加者数 648 名）．会員数が多い北米や西欧からの参加者にとって，アクセスの容易さや旅費負担の問題が大きいためと考えられる．日本人参加者にとっても事情は同様であり，今回の参加者数は北京大会に比べて大きく減少した印象を受けた．1991 年の日本での IAAE 東京大会では，我が国本学会の総力を挙げて実施の体制が組まれ，多くの参加者を得て盛大に開催されたことをご記憶の方も少なくないであろう（参加者 908 名）．今村（1990），黒柳（1991）および山田（1991）では東京大会開催前の高揚感が表れている．開催後の同年 12 月刊行の本誌では，大会特集号が組まれ大会の概要がまとめられている（谷口 1991）．

今回，ブラジル大会で配布された「Cowbell」では，残念ながら国別の参加者数が明らかにされておらず，過去の大会との比較を行うことはできない．

しかし，過去の大会の例をみると当然ながら開催国からの参加者数が増加する傾向があるほかには，特にアジアの中国からの参加者数の増加が指摘されている（大江 2006）．また，前大会が，中国の北京で開催されたことも作用していると考えられ，今回も中国名の発表者数は数多く目についたことから，中国勢は海外への留学生も含めて積極的な活動を行っているといえる．この点は，大塚（2013）によると，ブラジル大会の上位 15 位までの国別参加者数で，中国が 4 位に位置していることからも裏付けられる．なお，北京大会の概要報告は泉田（2009）がある．

第2表より，会長の国籍をみると，これまで 18 名のうち米国 5 名，英国 3 名，ドイツ 2 名となっており，会員数の多さや農業経済学の研究水準の高さとその影響力が反映されているといえる．アジア人では，過去にインド人 1 名，日本人 1 名である．ただし，インド出身で米国在住の第 14 代の P. Pingali 氏，今大会で会長選出された豪州出身で世界銀行の W. Martin 氏は米国籍として配付資料では区分されている．かつて，大川一司氏が会長選挙で惜しくも敗れたこともあり，大塚啓二郎氏の会長就任（第 16 代）は，我が国学会にとって長年の念願達成という意味でも，その意義はきわめて大きい．大塚氏の会長就任は，その研究業績

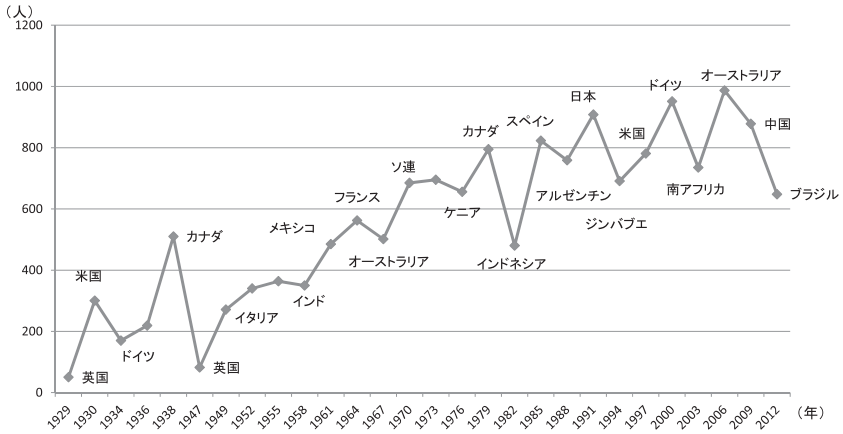

図　IAAE 大会と参加者数の推移

資料：Cowbell, 1, IAAE 2012.

第 2 表　IAAE 歴代会長国籍（設立期～2018 年期）

国　　籍	人　　数
米　国	5
英　国	3
ドイツ	2
フィンランド	1
フランス	1
ハンガリー	1
ベルギー	1
オーストラリア	1
カナダ	1
インド	1
日　本	1
計	18

資料：Cowbell, 2, IAAE, 2012.

が世界的に評価されたことが基本にあり，ノーベル経済学賞受賞者であるシカゴ大学の T．W．Schultz 教授のもとで PhD を取得し，海外での豊かな人的ネットワークを有し，長年精力的な研究活動を行ってきたことが認められた結果といえる．大塚氏は，IRRI 国際稲研究所の理事長も経験しており，国際的な研究組織運営の経験も豊富な人物であることから，我が国の農業経済学会の国際化を考える際に，大塚氏の経歴は先駆的ロール・モデルとして重要な示唆を与えている．なお，大会開催中には，日本人参加者で大塚氏を囲みささやかな昼食会を持ち懇親をはかった．

3．研究報告発表形態と内容の動向

ここでは，過去の大会での分析結果（大江 2006）との比較から，今大会の各セッションの論文数の変化についてみてみよう．第 3 表は，1997 年米国，2006 年豪州大会との比較により，セッション数と論文数の推移を整理したものである．なお，1997 年米国大会の概況報告は小林（1997），2006 年豪州大会については，泉田（2006）がある．1997 年大会での発表論文のプロシーディングスは，Peters et al.（1999）を参照されたい．参加者数は，前 2 大会に比べて減少しているが，全体の論文数は，大きく減少しているわけではない．その結果，参加者 1 人当たりの論文発表数は，1 本未満から 1.19 本（2012 年）へと増加している．つまり，ブラジル大会では，参加者 1 人当たり 1 本以上の研究発表を行っており，参加者の参加意欲が高まっている結果が示されているとともに，他方で主催者側の配慮の結果でもあるといえる．

なぜなら，各セッションの発表数をみると，口頭発表セッション数は若干増加したものの，論文数全体では減少している．これに対して，ポスターセッション（今大会では Visual presentation）での発表論文数が大きく増加しているからである．口頭発表のセッションやミニシンポジウム（今大会では Organized symposium）などは，時間的制約があり一定数以上の設定ができないため，ポスターセッションの発表数を増加することで，投稿者の発表の機会を増やし，参加者数の増加も意図していることがわかる．国際会議は，会議の質を維持することも重要であるが，同時に投稿者，とくに若い研究者にはできる限り参加の機会を与えることも必要であり，この点は，国際学会を主催する場合には，留意するべき点といえる．

次に，最もセッション数の多い，口頭発表のセッションのテーマについて，分類して整理してみよう．過去の 2 大会との対比をここでも行っている（第 4 表）．セッションのテーマ区分は，比較のため過去 2

第3表　IAAE 大会発表論文数の動向

区分	大会	1997 年大会	2006 年大会	2012 年大会	12/06 増減数	12/06 比
−	開催国	米国	オーストラリア	ブラジル	−	−
全体会議	セッション数	5	6	5	−1	0.83
招待論文	セッション数	15	14	16	2	1.14
(1997年パネル・ディスカッション)	論文数	60	53	48	−5	0.91
ミニシンポジウム	セッション数	26	47	47	0	1.00
	論文数	166	239	242	3	1.01
投稿論文口頭発表	セッション数	38	67	73	6	1.09
	論文数	111	305	256	−49	0.84
ポスター発表	グループ数	−	37	37	0	1.00
	論文数	126	195	224	29	1.15
論文数計 (全体会議除く)	−	463	792	770	−22	0.97
参加者数	−	781	987	648	−339	0.66
参加者1人当たり論文数	−	0.59	0.80	1.19	0.39	1.48

資料：1997 年大会と 2006 年大会は大江（2006），2012 年大会は Participant's Handbook，IAAE より集計.

大会の区分を踏襲して，今回新たな項目を付け加えている．1つのセッションには，先進国を対象とした分析や開発途上国を対象とするものなど混在している場合がある．その場合には，できる限り共通テーマで区分し，途上国関係の論文が多い場合には途上国農業に区分した．このように，区分には多少の恣意性を伴うが，研究動向の傾向把握には十分と考える．

まず，全体の傾向を過去2大会と比べて概観すると，開発途上国関係の開発経済学と資源・環境関係のセッション数が大きく増加している．この2分野で全体の半数を占めている．これには，先述したように中国関係の論文がよく目につき，そうした点も作用していると推察される．次いで，市場・流通関係のセッションも増加した．これに対して，農産物貿易関係のセッション数は減少している．それでは，次に分野ごとに詳しくみてみよう．

開発途上国関係では，土地市場，労働力市場などの投入要素市場関係が最も多く，次いで貧困削減，社会関係資本や技術普及，ジェンダーのセッションがみられた．他の分野に区分されたセッションにおいても，開発途上国を対象にした論文は少なからず含まれており，論文数でみると，途上国関係の論文数はさらに増加するといえる．

資源・環境関係では，以前からトピックの広がりがみられ，今回も同様な傾向が続いている．生物多様性とエコシステム・サービスのように，過去の大会にみられた多面的機能などのトピックが新たなトピックへ移行した課題もある．今回顕著に増加したトピックは，バイオ燃料などエネルギー問題と温室効果ガスなどの気象変動に関連するものである．筆者の専門であるレクリエーションや農村ツーリズムに関するセッションがみられなかったことは，残念である．前回多かった水資源に関するセッションは減少している．

セッション数で3番目に多かったのが市場・流通分野で，なかでも市場・価格分析が最も多いトピックで，農産物品質基準や動物福祉との関連，CGE モデルなどセクターモデルによる分析もみられた．

生産経済学の分野は，ほぼ1割程度で安定的な分野であり，今大会では生産性や効率性の分析が大半を占めていた．しかし，この分野は，伝統的に農業経済学の基盤的分野であり，今後ともその位置づけと重要性は変わらないと考えられるが，現在の研究動向からみると，もはや主要な研究トピックとはなっていないのである．

過去の大会から，セッション数が減少したのは，制度・政策，農産物貿易，消費者・需要の各分野である．具体的なトピックでは，制度・政策ではリスク・保険，農産物貿易では CGE モデル，消費者・需要では，食品安全性問題などが注目される．

以上，口頭発表のセッション数で，今回の研究動向をみてきた．これまでの大会でもみられた開発途上国関連の報告数が増加傾向を続けていることや，資源・環境関連のテーマが多様化してきていることが今大会においても特徴といえる．その反面，農業経済学の伝統的な分野である生産経済学関連のトピックは，縮小している．総じて農業経済学の対象分野は，さらに拡

第4表　IAAE大会口頭発表セッション数（テーマ別）

区分	内容	1997年大会		2006年大会		2012年大会	
		セッション数	割合(%)	セッション数	割合(%)	セッション数	割合(%)
開発経済学	途上国農業	2		10		6	
	中国農業農村	0		1		0	
	移行経済	2		1		0	
	農村インフラ	−		−		1	
	土地市場	1		2		3	
	労働市場・人的資本	1		1		2	
	栄養・貧困	1		0		2	
	社会関係資本	−		−		2	
	ジェンダー	−		−		1	
	技術普及	−		−		2	
	小計	7	18.4	15	22.4	19	26.0
資源・環境	水資源	1		4		1	
	森林資源・アグロフォレストリー	1		1		1	
	環境評価	3		1		0	
	レクリエーション	0		1		0	
	有機・持続的農業・土壌保全	3		1		2	
	有機農業・IPM	1		1		0	
	ライフサイクル分析	−		−		1	
	生物多様性	0		1		0	
	多面的機能	0		1		0	
	エコシステム・サービス	−		−		1	
	デカップリング・農家支払い	0		1		1	
	バイオ燃料・エネルギー	−		−		5	
	気象変動・温室効果ガス	−		−		5	
	小計	9	23.7	12	17.9	17	23.3
農産物貿易	農産物貿易	7		5		3	
	国際間投資	0		1		0	
	国際比較分析・CGEモデル	0		1		1	
	小計	7	18.4	7	10.4	4	5.5
制度・政策	信用・金融	1		1		1	
	リスク・保険	1		3		2	
	農協・団体	0		1		1	
	制度分析（コミニュティ）	0		1		0	
	政策評価	2		1		1	
	情報通信技術	−		−		1	
	研究投資・開発	2		2		1	
	小計	6	15.8	9	13.4	7	9.6
生産経済学	生産性分析	1		3		5	
	投入財配分	−		−		2	
	経済性評価	1		3		1	
	酪農	0		1		0	
	家計行動分析	1		1		0	
	小計	3	7.9	8	11.9	8	11.0
市場・流通	農産物市場・価格分析	2		3		5	
	マーケティング・ボード	−		−		2	
	食品流通・バリューチェーン	2		3		1	
	地域農産物	0		1		0	
	セクターモデル・CGEモデル	1		0		2	
	GMO	0		3		2	
	農産物品質基準・動物福祉	−		−		2	
	小計	5	13.2	10	14.9	14	19.2
消費者・需要	食と健康	0		2		1	
	食の安全性	0		1		2	
	需要分析	1		3		1	
	小計	1	2.6	6	9.0	4	5.5
総計		38	100.0	67	100.0	73	100.0

資料：第3表と同じ.

註：小計ごとの四捨五入により，総計100.0とは必ずしも一致しない.「−」は2012年大会で初めて現れた項目を示す.

大を続けているという印象を強めた学会であった．

4. む　す　び

本稿では，IAAE ブラジル大会における農業経済学の研究動向について，過去の大会との比較をしつつ考察を行った．その結果，開発途上国や資源・環境関連の発表テーマが増加していることを把握できた．こうした結果は，過去の大会から観察された点であり，その点では大きなトレンドに変化はないといえる．以上のことから，農業生産にかかわる伝統的な生産経済学の領域は，先進国を対象とした研究から開発途上国を対象とした研究へ一部はシフトしつつも，全体としての相対的な縮小傾向が逆転することは今後ともないと予想される．経験的事実として，農業経済学における「ペティの法則」とでもいえる現象が進行している．

つまり，テーマの多様化に伴い，農業経済学は，しだいに農業を含めた農村資源のマネジメントに関する経済学の様相を強めているという点が，筆者の印象である．このことから，変容した農業経済学が応用経済学の領域として，将来新たなアイデンティティの確立を求められることが予想される．今後は，生産経済学を基本としながらも，多様化する研究テーマに対応可能な，理論的フレームワークの構築が求められるようになるであろう．

また，大塚会長の活躍を目の当たりにできたことは，日本人農業経済学者の国際化におけるその可能性を示すものでもあり，本稿ではその点を書き留めておくことも必要と考えた．ただ，全体としてみれば，今大会は遠隔地でもあったため，日本人研究者のプレゼンスが大きいとはいえなかった点は残念である．

なお，次回大会は 2015 年にイタリアで開催される予定である．多数の会員の参加を期待したい．

［付記］本稿の作成に当たり，科学研究費補助金 No. 20248024 を活用している．

引　用　文　献

今村奈良臣（1990）「第 21 回国際農業経済学会議日本大会の成功へ向けて全力をあげて取り組もう」『農業経済研究』，62(3)，205.

泉田洋一（2006）「オーストラリア・ゴールドコーストでの国際農業経済学会」『農業経済研究』，78(3)，150-151.

泉田洋一（2009）「中国北京での第 27 回国際農業経済学会」『農業経済研究』，81(3)，193.

金井道夫（1994）「第 22 回国際農業経済学会（IAAE）に参加して」『農業経済研究』，66(3)，178.

小林康平（1997）「国際農業経済学会（IAAE）第 23 回大会に参加して」『農業経済研究』，69(3)，196.

黒柳俊雄（1991）「第 21 回国際農業経済学会議のテーマ “Sustainable Agricultural Development” について」『農業経済研究』，63(1)，65.

大江靖雄（2006）「IAAE 大会における研究動向―1997 年大会と 2006 年大会の比較考察から―」『農業経営研究』，44(3)，31-34.

大塚啓二郎（2013）「国際農業経済学会の成果と課題」泉田洋一編著『ポリヴァレント化する農業・農村経済学とその総合化』農林統計出版，91-105.

西村博行（1983）「農業開発における成長と公正―国際農業経済学会の第 18 回大会からの報告―」『農業経済研究』，55(1)，55-56.

Peters, G. H. and von Braun, J. (Eds) (1999) *Food Security, Diversification, and Resource Management: Refocusing the Role of Agriculture.*[2] Proceedings of the Twenty-third International Conference of Agricultural Economists, Hants: Ashgate Publishing Company.

谷口信和（1991）「大会開催の経緯と大会の概要」『農業経済研究』，63(3)，185-189.

土屋圭造（1971）「第 14 回国際農業経済学者会議雑感」『農業経済研究』，42(4)，184-188.

山田三郎（1991）「第 21 回国際農業経済学会議と IAAE の歴史」『農業経済研究』，62(4)，258.

要旨：本稿は，第 28 回国際農業経済学会（IAAE）ブラジル大会における発表論文を対象として，過去の IAAE 大会と比較することでその研究動向をレビューした．IAAE 大会は，最も大きい農業経済学の大会であることから，世界的な研究動向を把握することができる．本稿では，IAAE 日本人会長が今大会を統括するという記念すべき大会であったことから，今後の我が国農業経済学会にとっての意義についても考察した．本稿での考察から得られた知見は以下の通りである．1）今大会では口頭報告数が減少して，ポスター報告論文数が増加したことで，若手研究者への参加を促す効果を有している．2）開発経済学と資源・環境経済学の分野での口頭報告セッション数が増加し，全体の半数を占めていた．特に，資源・環境経済学の分野では，トピック数が増加している．また，市場分析関係も 2 割のシェアを占めるまでに増加した．総じて，農業経済学の対象分野が伝統的な生産経済学の分野から拡大しており，農村資源マネジメントの経済学へ向かっていることを理解できる．

キーワード：国際農業経済学会（IAAE），研究動向，農業経済学